

# 批判的都市理論とは何か？

ニール・ブレナー \* (馬渡 玲欧 \*\* 訳)

初出：Neil BRENNER, “What is critical urban theory?,” *City*, 13, 2-3, 198-207, 2009.

再掲：Neil BRENNER, “What is critical urban theory?,” in *Cities for People, Not for Profit: Critical Urban Theory and the Right to the City*, eds. Neil BRENNER, Peter MARCUSE and Margit MAYER.

London and New York: Routledge, 2011, pp. 11-23.

**要約：**批判的都市理論とは何か？このフレーズはポスト1968年の左派あるいはラディカル都市研究の伝統を特徴づけるためにしばしば記述的な意味で用いられる一方で、それは明確な社会理論の内容をも有すると私は主張したい。この目的を果たすためにこの論文では何人かのフランクフルト学派の社会哲学者の著作に依拠しながら、批判理論を相互に関連する四つの要素によって解釈する——それは理論的性質、再帰性、道具的理性批判、そして現実と可能性の断絶の強調である。この解釈を基にして、結論部では手短かに批判的社会理論内での都市問題の位置づけを検討する。21世紀初頭、批判的社会理論内の鍵となる四つの要素は、資本主義的都市化の現代的様式に絶えず関わることを要求する。徐々に普遍化する世界規模の都市化の状況下で、批判的社会理論のプロジェクトおよび批判的都市理論のプロジェクトはかつてないほど相互に関連している。

## イントロダクション

「批判的」都市理論とは何か？このフレーズは一般的に言えばポスト1968年期における左派あるいはラディカルな都市論者たちの諸著作——例えば、アンリ・ルフェーヴル、デヴィッド・ハーヴェイ、マニュエル・カステル、ピーター・マルクーゼ、彼らによって刺激や影響を与えられてきた他の多くの者の諸著作 (Katznelson, 1993; Merrifield, 2002) に対する手短かな参照先として用いられる。批判的都市理論は、受け継がれてきた学問の分業、そして国家主義的、テクノクラートの、市場主導および市場志向的な都市認識の形式を拒否する。この意味で、批判理論は「主流」の都市理論とでも呼べそうなもの——例えば、都市社会学におけるシカゴ学派から受け継いだアプローチ、政策科学のテクノクラートのあるいは新自由主義的な諸形式とともに展開してきたアプローチとは根本的に異なる。社会の組織化、官僚的合理性、あるいは経済的効率性に属する超歴史的な法則が表出したものとしての都市の現状を肯定するよりもむしろ批判的都市理論が強調するのは、政治的、イデオロギー的に媒介され、社会的に争点となり、ひいては人が従順となってしまう都市空間の性質——すなわち、社会的権力にまつわる歴史的に特有な諸関係の場、媒体、結果として、都市空間が継続的に(再)構築されていくこと——である。したがって批判的

都市理論は、受け継がれてきた都市の諸認識に対してだけでなく、より一般的には現存する都市の編成に対する矛盾する関係に基づいている。批判的都市理論が主張するのは、別種の、より民主的で、社会的には公明正大であり、さらには持続可能な都市化のかたちは可能だということである。たとえそのような可能性が現状では支配的な制度的配置、諸実践、イデオロギーによって抑圧されているとしても。要約すると、批判的都市理論は、都市の内部と同時に都市の間において、イデオロギー批判(社会科学のイデオロギーを含む)ならびに、権力、不平等、不正義、そして搾取に対する批判に携わるのである。

しかしながら、批判の観念、より特定化すれば批判理論の観念は、単に記述のための術語ではない。それらは明確な社会理論の内容を有している。その内容は、少なからずヘーゲル、マルクス、西欧マルクス主義の伝統の内にある啓蒙およびポスト啓蒙の社会哲学の様々な要素に由来する (Koselleck, 1988; Postone, 1993; Calhoun, 1995)。加えて、批判的社会理論における批判の焦点は、過去200年の資本主義の発展の過程で大いに変遷している (Therborn, 1996)。もしこの号の『CITY』に知的、政治的アジェンダがあるのだとすると、前述の伝統の内を展開した鍵となる議論、とりわけフランクフルト学派の議論のいくつかを再訪することには価値がある。それらの議論は、もししばしば大いに暗黙の了解になっ

\* ハーバード大学デザイン大学院

\*\* 東京大学大学院

ているのだとしたら、批判的都市論者たちの現代の仕事にとっての重要な参照点を間違いなく与えることだろう。

以下で強調される主要な諸論点のうちのひとつは、都市あるいはその他の領域に関する批判的社会理論にとってのアプローチが有する歴史的特殊性である。マルクスとフランクフルト学派の著作は、資本主義的発展の冷酷な創造的破壊による前進運動によって今や取って代られている資本主義の前段階の間——それぞれ競争的(19世紀中盤から末にかけて)、フォード主義・ケインズ主義的(20世紀中盤)である——に生じた(Postone, 1992, 1993, 1999)。それゆえに、鍵となる現代的な問いは、批判理論にとっての可能性の条件は今日21世紀初頭の、徐々に資本主義のグローバル化、新自由主義化、金融化の編成が進む文脈においていかに変化してきたのかということである(Therborn, 2008)。

そのうえこのような検討は、批判的社会理論の広範なプロジェクトの内に、都市の諸問題をどのように位置づけるかという困難な問題に直ちに陥ってしまう。ヴァルター・ベンヤミンのパサージュ論という重要な例を除いては、フランクフルト学派と関係する主要人物の誰も都市の諸問題に対して大きな注目を向けることはなかった。彼らにとって批判理論は、例えば家族の諸構造、文化の諸形態、そして社会心理学的なダイナミクスによる媒介を含み込む国家、法、商品化の批判に関わるものであった(Jay, 1973; Kellner, 1989; Wiggershaus, 1995)。この志向は、資本主義的発展の競争的、そしてフォード主義・ケインズ主義的段階のあいだでは、都市化の過程が一般的に見て例えば工業化、階級闘争、国家規制、そして文化産業といったより根本的と思われる社会的諸力を率直に空間的に表出したものとしてみなされている限りにおいて、一定程度の妥当性を有していた。しかしながら、私は以下でこのような志向は21世紀初頭においてもはや維持できないと論じたい。なぜならば、私たちはまさに世界のアーバニゼーション——アンリ・ルフェーヴルによって約40年前に予期された「都市革命」を目撃しているからだ(Lefebvre 2003 [1970])。徐々に普遍化する世界規模の都市化(Lefebvre, 2003 [1970]; Schmid, 2005; Soja and Kanai, 2007)の状況下、批判的社会理論のプロジェクトおよび批判的都市理論のプロジェクトは、かつてないほど相互に絡み合っている。

## 批判と批判的社会理論

批判に関する現代的な考え方は啓蒙から生じており、カント、ヘーゲル、ヘーゲル左派の著作において最も体系的に展開していった(Marcuse, 1954; Habermas, 1973; Jay, 1973; Calhoun, 1995; Therborn, 1996)。しかしその考え方はマルクスの著作において、政治経済学批判にまつわる考え方の発展を伴いながら新たな重要性を帯びるようになった(Postone, 1993)。マルクスにとっては、政治経済学批判は一方ではイデオロギー批判の形式、認識のブルジョア的諸形態に広がっている歴史的に特有な神話、物象化、そして二律背反の露呈を伴っていた。まさに重要なことは、マルクスは政治経済学批判を、資本主義に関する思想や言説への批判としてだけでなく、資本主義を超越するための尽力に寄与するものとして理解した。この弁証法的な考え方において、批判にとっての鍵となる課題は、資本主義によって形成された歴史的に特有な社会的全体性の内にある諸矛盾を暴露することにある。

批判に対するこのアプローチは、いくつかの重要な諸機能を有しているように見受けられる。第一に、そのアプローチは資本主義的な社会編成を確証する権力、排除、不正義、そして不平等の諸形態を暴露する。第二にマルクスにとって、政治経済学批判は、進行中ならびに出現する社会政治的闘争の光景を照らし出す意図を有している。つまりそのアプローチは、政治的領域のイデオロギー諸言説を、ブルジョア社会内に潜在している(階級的)確執および社会的諸勢力と結びつけている。おそらく最も決定的なのは、マルクスが批判を理論と実践の双方において、資本主義に対するオルタナティブを作り出す可能性を探究する手段として理解していたということである。したがって、政治経済学批判は、どのように資本主義の諸矛盾がシステムを掘り崩すのか、それと同時にどのようにその諸矛盾がシステムを超え、社会の潜在的な可能性、そして社会／自然の諸関係を組織するための他の方法に向かうのかを示すことに寄与した。

20世紀の間、マルクスの政治経済学批判は、第二インターナショナルの伝統的なマルクス主義を含む批判的社会分析の多様な諸伝統の内に(Kolakowski, 1981)、また西欧マルクス主義と関連するラディカルな思想のオルタナティブな要素(Jay, 1986)に充てられている。しかしながら、批判の概念が方法的、理論的、そして政治的問題として最も体系的に探究されたのは批判的社会理論のフランクフルト学

派の内であったことは間違いない。この論点に向き合う際、フランクフルト学派内の主要人物はさらに政治経済学、社会心理学的ダイナミクス、進化論的諸潮流、そして現代資本主義の内的諸矛盾に関して、革新的であり、知的、政治的に破壊的效果をもたらすような研究プログラムを発展させていった (Bronner and Kellner, 1989; Arato and Gebhardt, 1990; Wiggershaus, 1995)。

1937年に亡命先のニューヨーク・シティから手紙を書き送り、「批判理論」という専門用語を紹介したのはまさしくマックス・ホルクハイマーであった (Horkheimer, 1982 [1937])。その概念は続いて彼の同僚であるテオドール・アドルノ、ヘルベルト・マルクーゼによって、後には非常に異なる方向ではあるがユルゲン・ハーバーマスによって、1980年代に至るまで発展・拡大された。フランクフルト学派の考えでは、批判理論は労働の存在論、および資本主義のもとでの社会変革のための特権的な基盤としてプロレタリア階級闘争を実施することを伴う、第二インターナショナルのもとで広く行き渡ったマルクス主義の正統なあり方からの決定的な断絶を示した。加えて、20世紀中盤の間、批判理論のフランクフルト学派はいくつか他の文脈に依存した特定の関心や懸念——ドイツやその他の国のファシズムに対する批判、ヨーロッパやアメリカの戦後資本主義のもとでのテクノロジー、大衆消費主義、文化産業に対する批判、そして、特にヘルベルト・マルクーゼの後期著作での、現在の制度的編成に潜在する人間解放にとっての可能性が抑圧されたことに対する批判を含む——によって活性化していた。

批判理論に関するフランクフルト学派の考え方は、当初は認識論的概念として練り上げられた。ホルクハイマーによる1937年の古典的論稿である「伝統的理論と批判的理論」では、その考えが社会科学とブルジョア哲学にとっての実証主義的およびテクノロジー的アプローチに対するオルタナティブを画定するのに役立った (Horkheimer, 1982 [1937]: 188-252)。この分析の方針は、よく知られているようにアドルノによって1960年代に継続されたが、それはカール・ポパーとの実証主義論争のなかで (Adorno et. al., 1976)、また弁証法と美学論にまつわる哲学的著作というまったく異なったかたち (例えば、O'Connor, 2000を参照) で続けられた。批判理論の考え方は、1970年代初等のニクラス・ルーマンとのテクノロジーをめぐる論争において (Habermas and Luhman, 1971)、または1980年代中盤の代表作である『コミュニケーション的行為の理論』でのよ

りいっそう洗練、熟練したかたち (Habermas, 1987, 1985) で、ハーバーマスによってまた別の新たな方向性で展開された。

フランクフルト学派の批判理論のなかで最も政治的に激しい見解は、1960年代中盤に、特に1964年の古典的著作『一次元的人間』のなかでヘルベルト・マルクーゼによって提示されたと言えるだろう。マルクーゼにとって、批判理論は資本主義社会の現在の形態に関する内在的批判を伴った。すなわち彼が主張するには、批判理論は「破壊的な傾向と諸勢力として、現存の社会に絶えず付きまとう歴史的なオルタナティブ」と関連する (Marcuse, 1964: xi-xii; イタリア語版は付け加えた)。したがって、マルクーゼのプロジェクトと、マルクス由来の政治経済学批判の中心的側面との間には直接的な関連——つまり現存の社会関係の矛盾に起因する、現在の内に潜在している解放的なオルタナティブの探求 (Postone, 1993によって体系的に強調されている) がある。

## 批判理論の主要な要素：四つの命題

もちろん、ホルクハイマー、アドルノ、マルクーゼ、そしてハーバーマスといった著者の間には、深い認識論的、方法論的、政治的、そして実質的な相違がある。それにもかかわらず、彼らの著作は集団として批判理論の核となる根本的な考え方を練り上げたということが主張され得る (別の視点からではあるが、本稿と両立する読解についてはCalhoun, 1995を参照)。この考え方について、四つの主要な命題に関連づけて要約することができる。すなわち、批判理論は理論である。批判理論は再帰的である。批判理論は道具的理性批判に関わる。そして批判理論は現実と可能性の間の断絶に焦点を当てる。

これらの命題は密接に相互に絡み合いながら構成するものとして理解されるべきである。つまり、各々の命題の完全な意義は他の三つの主張との関係で把握されるのである (図1)。

## 批判理論は「理論」である

フランクフルト学派において、批判理論は弁解せずとも抽象的である。批判理論は認識論的、哲学的な内省によって特徴づけられている。形式的な諸概念の展開。歴史的諸潮流に関する一般化。演繹的、帰納的な論証の諸様式。そして歴史的分析の多様な

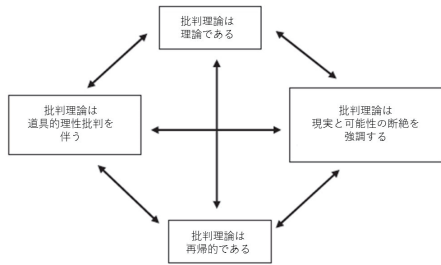


図1 批判理論に関する相互に構成しあう  
四つの命題

諸形式。それはさらに具体的な研究に基づいている。つまり、伝統的あるいは批判的な方法によって組織されていようとなかろうと、証拠に基づいている。マルクーゼ(1964: xi)が書くように、「最適な発達の可能性を見極め、規定するために、批判理論は社会の資源の実際の組織化と利用からの抽象、およびこの組織化と利用の結果からの抽象を行わねばならない。」この意味で、批判理論は理論である。

したがって批判理論は、社会変革に関していかなる特定の進行方向のための公式として役立つことを意図してはいない。つまり、社会変革のための戦略図ではない。そして、社会運動のための「ハウツー」スタイルガイドではない。批判理論は実践の領域にとっての調停機能を有しているはず——付記するならば、そうあるべき——であり、進歩的でラディカル、あるいは革命的であるような社会的・政治的アクターが有する戦略的視角に対して活気を与える意図を明らかに有している。しかし同時に重要なことは、批判理論のフランクフルト学派的な考え方は、「なにをなすべきか」というかの有名なレーニンの問いに分析的に先行しているところの抽象化の契機に焦点を当てているということである。

## 批判理論は再帰的である

フランクフルト学派の伝統において、理論は特定の歴史的諸条件と諸文脈に埋め込まれていると同時に方向づけられている。この概念化は少なくとも二つの主要な含意を有している。第一に、批判理論はいかなる立場——実証主義的、超越論的、形而上学的あるいはその他——の全面的な拒否を伴う。それらの立場は、文脈依存的な特定の歴史的時空の「外側」に立脚することは可能であると主張するような立場である。批判理論を含むすべての社会的認識

は、社会的歴史的変革の弁証法の内に埋め込まれている。したがって、それは本質的には風土的な特性をもった文脈依存的なものである。第二に、フランクフルト学派の批判理論はすべての認識の状況依存性に対する一般化した解釈学的関心を超越する。より特定化して言うなら、批判理論では認識、主観性、そして意識に関して敵対し対立する形式がいかにか歴史的社会的編成の内では生じるのだろうかという問いに焦点が当てられている。

批判理論家達は、破局的であり、破綻しており、矛盾した資本主義の性質を社会的全体性として強調することによってこの論点に立ち向かう。もし全体性が閉ざされたものであり、まったく矛盾がなくいわば完全なものとしたならば、そこには全体性に対する批判的意識は存在するはずがないだろう。つまり、批判の必要性が無くなってしまっただろう。加えて、批判は構造的に不可能なものになってしまうだろう。社会が社会そのものとの葛藤の内にある限りにおいて、批判は確実に生じるのである。なぜならば、発展の様態は自己矛盾のだからである。この意味で批判理論家達は、彼ら自身と研究アジェンダを現代資本主義の歴史的進化の内に位置づけることにのみ関心を持っているわけではない。まさに決定的なのは、彼ら自身や他者が持つ批判的意識のあり方を可能にする現代資本主義とは何かということをも彼らが理解したいということである。

## 批判理論は道具的理性批判を伴う

よく知られているように、フランクフルト学派の批判理論家達は道具的理性批判を展開した(Habermas, 1985, 1987によって詳細に分析されている)。マックス・ヴェーバーの諸著作に依拠しながら彼らは、目的それ自体の審問をすることなしに、目的合理的で、手段と目的の効率的な連関を志向するような手段—目的合理性の社会全体における一般化に対して反論する。この批判は、産業組織、テクノロジー、そして行政の様々な領域にとっての含意を持ったが、ここで最も重要なのは、フランクフルト学派の理論家達はさらにそれを社会科学の領域に適用したということである。この意味で批判理論は、科学的認識の道具の様態に対する説得力のある拒絶を伴う——すなわちそれらの様態は、社会的、物理的世界を操作・支配し、現行の権力のあり方を支持するために、現存の道具的諸編成をより効率的・効果的にするようにデザインしたのである。そのかわ

り、批判理論家達は認識の目的を審問すること、したがって規範的な問いと明確に関わり合うことを求めた。

社会科学に対する彼らの歴史的に再帰的なアプローチと矛盾せず、フランクフルト学派の学者達は次のことを主張した。批判理論は、狭くまたはテクノクラートの洞察を取り入れるよりもむしろ、実践的一政治的、そして規範的な志向を明らかにした方がいいということである。認識の道具主義的な様態は必然的に、調査対象と自分自身との分離を前提にする。しかしながら、一度その分離が拒絶され、調査がなされている社会的実践の文脈の内に認識する者が同じく埋め込まれていると理解されるならば、規範的な問いは避けがたいものとなる。したがって、再帰性の命題と道具的理性批判の命題は直接、相互に関連している。

結果的に批判理論家は、いわゆる理論/実践問題を議論する際に、理論を実践にいか「適用」するかという問いには言及していない。むしろ彼らはこの弁証法的な関係をまさに反対の方向で考えている——いわば、実践の領域(例としては規範的な考察)がどのように常にすでに、後者(訳者注：実践)が抽象的な水準にとどまっているときでさえ、理論家の仕事を活気づけているのか。ハーバーマスは1971年に次のように書いた。

(批判理論と関連する) 弁証法的解釈は、社会的実践の関係との観点、社会的立場の観点から見ると、それぞれ社会的労働の過程、そしてある目標について政治的勢力を啓蒙する過程において、認識する主観を把握する。(Habermas, 1973, pp. 210-211)

## 批判理論は現実と可能性の断絶を強調する

Therborn (2008) が論じるように、フランクフルト学派は資本主義的モダニティに関する弁証法的批判を議論の射程に収めている。つまり、システムによる排除、抑圧、そして不正義を批判する一方で、社会的編成によって開かれた人間解放のための諸可能性を肯定する批判である。それゆえに、批判理論の課題は現代資本主義と関連する支配のあり方を研究するだけでなく、それと同時に、まさにこのシステムによって抑圧されてもいるが同時にその内に埋め込まれている解放の可能性を発掘することにもある。

フランクフルト学派の諸著作の多くでは、この志向は「革命的主体の探究」を伴っている。すなわち、資本主義によって今のところ抑圧されているが、解放される可能性を実現可能にするであろう、ラディカルな社会変革の媒介者を見出す関心を伴っている。しかしながら、プロレタリア流の革命へのいかなる希望をフランクフルト学派が捨てるのであれば、戦後における革命的主体の彼らの探究は社会変革の可能性という点ではむしろ陰鬱なベシミズムを、特にアドルノとホルクハイマーの著作では、相対的にみると抽象的な哲学的・美学的関心への退却を生み出したのだった(Postone, 1993)。

対照的に、マルクーゼはこの問題について非常に異なった立場を『一次元的人間』(1964年)の「序論」で示す。ここで彼は、フランクフルト学派の同輩達と次の点で同意する。資本主義的産業化の形成期とは対照的に、20世紀後半の資本主義はいかなるはつきりとした「社会変革の媒介者や行為主体」を欠いている。言い換えれば、プロレタリアートはもはや階級「そのもの」として作用していない。それにもかかわらず、マルクーゼ(1964: xii)は力強く次のように主張する。「全体社会にとって、社会の成員の全員にとって、質的変革への要求はかつてないほどに差し迫っている(中略)。」この背景に対してマルクーゼは、彼が執筆をしていた時代において、むしろ批判理論の抽象的な特質が、解放を求めるラディカルな社会変革を明確に媒介する者の欠如と原初的に結びついていたことを提起する。加えて、批判理論と関連した抽象化は具体的一歴史的闘争を通して鈍くなり、解体されるしかないであろうと彼は主張する。マルクーゼ(1964: xii)が示すには、「理論的諸概念は」「社会変革とともに終わりを迎える。」したがって、この力強い主張は「理論」としての批判理論のアイデアに我々を連れ戻してくれる。まさに批判理論の「批判的」な要諦は、歴史的に条件づけられ、歴史的に方向づけられ、その「理論的」な志向は進行中の社会的・政治的諸変革によって絶えず形成され、作り変えられる。

マルクーゼの立場は、『資本論』第三巻の有名な主張を思い出させる。それは、もし実在と現象のあいだの区別がなければ、すべての科学は表層的になるだろうというものである。同様にマルクーゼが示すのは、ラディカルあるいは革命的な社会変化が生じている世界では、批判理論は効果的に周縁化され、あるいは解体さえされてしまうだろうということである——その批判的志向においてではなく、「理論として」——。つまり、批判理論は具体的な実践と

なるであろう。あるいは、異なる方向から指摘するならば、革命的であり、変革的であり、解放的な社会的実践が現代資本主義のもとでたく制限され、拘束され続けるのは、批判理論が批判「理論」のままであり続けるからこそである——それはただの日常の社会的実践ではない。この観点から見ると、いわゆる理論/実践の分断は理論的混乱あるいは認識論的な不適切さ故に人工物なのではなく、批判理論が埋め込まれている疎外され矛盾した社会編成のために人工物なのである。この分断を乗り越えることのできる理論はない。なぜならば、理論は定義上、理論的には乗り越えられないからだ。つまり、理論は実践においてしか乗り越えられないのである。

## 批判理論と都市化の問い

マルクスの著作がポスト1968年の批判的都市研究の領域において広範な影響を及ぼした一方、この分野の貢献者について見るとフランクフルト学派の著作に直接関与している者は——もし存在するとしても——ほとんどいない。それにもかかわらず、私は信じているのである。批判的都市研究の知の地平に自身を位置づける著者のほとんどが、少なくとも一般的な表現で言うならば、以下に要約する四つの命題によって表明された批判理論の考え方を是認するであろうと。

- 批判的都市研究は資本主義下の都市過程の性質に関する抽象的で理論的な議論の必要を主張する。その一方で、直接的、実践的、言い換えれば道具的諸関心に対する「隷属」としての理論の考え方を拒否する。
- 批判的都市研究は、批判的な視角を含みながら、都市の諸問題に関する認識を、歴史的に特有であり権力の諸関係によって媒介されたものとしてみなす。
- 批判的都市研究は、拡大する都市編成の維持と再生産を促進するような、道具主義的、テクノクラートの、市場優位な都市分析のありかたを拒否する。そして、
- 批判的都市研究は、現代の都市の内に潜在しており未だシステムによって抑圧されている、解放的でありラディカルな別種の都市化のあり方の可能性を発掘することに関心を抱いている。

もちろん、批判的都市理論に与えられたいかなる貢献も、これらの命題のいくつかに順応するものも

あればそうでないものもあるかもしれないが、しかしそれらは全体としてその分野にとっての重要な認識論的基盤を累積的に築いているようである。この意味で、批判的都市理論は知的・政治的な地勢のもとで発展してきた。その地勢は、マルクスだけでなくフランクフルト学派の様々な理論家達によってすでに広範囲に耕されてきた。1970年代初頭におけるこの分野の構築以来、批判的都市論者達のあいだで交わされてきた方法論的、認識論的、実質的な討論について、どちらかといえば顕著である分裂的ときえいえる性質（例えば、Saunders, 1985; Gottdiener, 1985; Soja, 2000; Brenner and Keil, 2005; Robinson, 2006を参照）を考えると、広範な領域での基本的な合意を見失わないことが重要なのである。

しかしながら、批判的都市研究の領域は21世紀初頭に進展と多様化を続けてきたのであるから、「批判」理論とされるものとしてのその性質は、注意深い精密検査、そして体系的な討論にかけられるだけの価値がある。ハーバーマスに対する痛烈なフェミニスト側からの批判のなかで、フレイザー（1989）はかの有名な問いかけを行なった。「批判理論の批判とは何か？」フレイザーの問いは、この号の『CITY』で議論をしている研究領域においても提起されうる。つまり、「批判的都市理論にとっての「批判」とはなにか？」資本主義的な都市化が世界規模での創造的破壊の前進運動を続けているからこそ、批判の意義や様相は決して潰えることはない。対照的に、その前進運動が生み出す過程および様々なコンフリクトにおいて不均等に進展する政治的・経済的地理との関連で、批判の意義や様相は絶えず存在を蘇らせるのである。私の意見では、これは今日の批判的都市理論家の前に立ちはだかっている、大きな知的・政治的挑戦の一つであり、その挑戦はこの号の『CITY』の寄稿者が極めて生産的に取り組む挑戦である。

上述のように、マルクスによって発展された批判の概念と、フランクフルト学派において練り上げられた批判理論の洞察は、資本主義のある特定の歴史的な編成のうちに埋め込まれていた。批判理論の再帰性の要求と首尾一貫するように、これらのアプローチの各々は明らかにそのような編成の内に埋め込まれているものとして理解され、また自覚的に後者を批判に従属させることを志向していた。上記のように練り上げられていった再帰性の要求は、21世紀初頭において、都市あるいは他の領域の批判理論を時代にふさわしいものにし、新たに作り直すいかなる試みと中心的に関与しなければならない。しか

しながら、ポストン(1993, 1999)が主張しているように、批判理論の可能性の条件はポスト・フォードイズム、ポスト・ケインズ主義的資本主義のもとで完全に再構築されているのである。社会変革の解放的なかたち、そしてそれと関連するところの資本主義に対するオルタナティブの想像力への構造的な制限の性質は、以下によって質的に変容されている。地理経済的統合の加速、強まる資本の金融化、福祉国家的干渉の戦後モデルの危機、国家形態の未だ進行中である新自由主義化、そして惑星規模(プラネタリー)で生じる環境危機の深刻化(Albritton et al., 2001; Harvey, 2005)。最近のグローバルな金融危機は——少なくとも10年間にわたって世界経済に波紋を起こしている、地域規模の壊滅的な破局という「ジェットコースター」の最終的な結果であるのだが(Harvey, 2008)——危機を誘発する世界規模のリストラクチャリングの新たなラウンドを生み出している。そのことは、いかなる批判的社会理論にとってもその可能性に関する認識論的、政治的、そして制度的条件をさらに再び明確に述べることとなる(Brand and Sekler, 2009; Gowan, 2009; Peck et al., 2010)。批判理論の前述の四つの要素は21世紀初頭において確実に喫緊の妥当性を有したままではあるが、一方でその特有の意義や様相は慎重に再概念化される必要がある。批判理論のプロジェクトを引き受けている者にとっての挑戦は、まだらになった世界経済の光景をまたがるように生み出されている、資本主義の持続する前進運動、それと関連する危機の傾向と矛盾、そして闘争と反対の衝動にとって適切な方法で再概念化をすることである。

この課題に向き合うことは、概して批判的社會理論の分析枠組みのうちに都市問題をより体系的に統合すること次第で決まると、私は提起しよう。上述の通り、都市化の問題構成は、古典的なフランクフルト学派の分析において相対的にみて注目を集めることに乏しかった。ベンヤミン(2002)による、19世紀パリの資本主義的変容にまつわる射程の広い素描が重大な学術的な関心を生じさせたのは比較的最近になってからのことである(Buck-Moss, 1991)。資本主義発展の競争的、フォード主義的・ケインズ主義的段階の間でさえ、都市化の過程は——とりわけ大規模な都市地帯の編成と拡大において表されている——資本蓄積のダイナミクスにおいて、そして日常的な社会関係と政治的闘争の組織化において決定的に現れた。しかしながら、現在の地理歴史的な条件下では、都市化の過程は世界規模で徐々に普遍化してきている。都市化はもはや、産業資本主義のもと

での「大都市」(great towns)<sup>訳注1</sup>の拡大、フォード主義・ケインズ主義的資本主義のもとでの不規則に広がる大都市の生産中心点、郊外の方格設計的な定住、地域的なインフラの編成、あるいは世界の「巨大都市」において、都市を基盤とした人口について予期される直線的な拡大を単純に引き合いに出すわけにはいかない。そのかわり、Lefebvre(2003 [1970])が約40年前に予想したように、今やこの過程は不均等に伸び縮みする「都市の織物」によって徐々に展開している。この都市の織物は、全世界経済にまたがる投資パターン、居住空間、土地利用マトリックス、インフラ網の様々なタイプを構成する。確かに都市化は都市、都市地域、巨大都市地域の持続する大規模な拡大のうちに未だにあらわれている。しかしながら都市化は同様に、多様かつ凝集が少なく集まった居住空間に関して、進行中である社会空間的変容をも伴っているのである。その居住空間は、都市間、大都市間のインフラ網を絶えず複雑にすることを通して、主要な都市の中心部をこれまで以上に緊密に相互に結びつけている。要約すれば、我々は少なくとも、全空間的規模で惑星規模の空間の全表面にまたがっている資本主義的囲い込みの過程を通して、都市化の過程の激化と拡張を目撃しているも同然なのである(Lefebvre, 2003 [1970]; Schmidt, 2005; De Angelis 2007)。

資本主義的発展の前期段階において都市化の地理は深刻なほどに不均等である——しかし、そのパラメーターはもはや居住空間を、都市、都市地域、大都市地域、あるいは巨大都市地域として規定されるかどうかといった、個々の種別に限定することはない。結果的に、現代の状況では、都市なるものはもはや、相対的に境界を有した別個の土地としてみなされることはできない。そのかわり都市なるものは、普遍化した惑星規模の状況となってしまった。その状況のなかでは／その状況を通して、資本蓄積、政治・経済的生活の規制、日常的な社会諸関係の再生産、地球と人間性のありうる未来をめぐる論争が編成されると同時に戦わされている。この点に照らして、都市問題をたくさんある特定のサブトピックのなかの単なるひとつのトピックとみなすことは段々と支持できないものになっている。そのサブトピックに対して、批判理論的アプローチは適用されてきたわけだが、例えば並べてみるだけでも、家族、社会心理学、教育、文化産業といったようなものが挙げられる。それどころか、上述のように、批判理論と関連した主要な方法的、政治的志向の各々は、今日、資本主義的な都市化、およびそれが社会・政治・

経済、人間／自然の関係にとって広く影響を及ぼす結果に関する、現代的で世界規模のパターンに絶えず関与することを求められる。

これは意図的に挑発的な主張であり、この論稿はそのような関与や(その関与が生じるであろう)幅広い知的パラメーターのいくつかの必要を画定する穏健な試みを提示するにすぎない。明らかに、批判理論に関するこの「都市論的」な再方向づけを効果的に洗練させるためには、さらなる理論的熟考、そして広範囲で具体的な比較調査が必要となる。同様に、現代の都市化に関する批判的な認識を沸き立たせるために求められる制度的条件を養うための創造的、協同的な戦略化を必要とする。私はこれまで、批判的都市論者は21世紀初頭の都市のリストラクチャリングの過程に照らしてみたとときの理論的な関与、志向、そして参与に関する「批判的」な性質を明確にし、絶えず再定義するために働かなければならないと主張してきた。そのような過程と関連した影響が広く及ぶ変容があるとすれば、同様に都市化の問題構成をより体系的に、包括的に、批判理論全体の知的アーキテクチャに統合する機が熟したといえるだろう。

## 謝辞

有益な議論と批判的なフィードバックをくださったピーター・マルクーゼ、マジット・マヤ、そしてクリスティアン・シュミットに感謝の意を表明します。

## 訳注

訳注1 エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』(1845年)の「大都市」章を踏まえている。原著での章題はDie großen Städte。

## 参考文献

- Adorno, T., Albert, H., Dahrendorf, R., Habermas, J., Pilot, H. and Popper, K. (1976) *The Positivist Dispute in German Sociology*. Trans. G. Adey and D. Frisby. London: Heinemann.
- Albritton, R., Itoh, M., Westra, R. and Zuege, A. (eds) (2001) *Phases of Capitalist Development: Booms, Crises, Globalizations*. New York: Palgrave.
- Arato, A. and Gebhardt, E. (eds) (1990) *The Essential Frankfurt School Reader*. New York: Continuum.
- Benjamin, W. (2002) *The Arcades Project*. Ed. R. Tiedemann, trans. H. Eiland and K. McLaughlin. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Brand, U. and Sekler, N. (eds) (2009) 'Postneoliberalism: a beginning debate' [Special issue], *Development Dialogue* 51, pp. 3–211.
- Brenner, N. and Keil, R. (eds) (2005) *The Global Cities Reader*. New York: Routledge.
- Bronner, S. and Kellner, D. (1989) *Critical Theory and Society: A Reader*. New York: Routledge.
- Buck-Morss, S. (1991) *The Dialectics of Seeing: Walter Benjamin and the Arcades Project*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Calhoun, C. (1995) 'Rethinking critical theory', in C. Calhoun, *Critical Social Theory*, pp. 1–42. Cambridge, MA: Blackwell.
- Fraser, N. (1989) *Unruly Practices*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Gottdiener, M. (1985) *The Social Production of Urban Space*, 2nd edn. Austin: University of Texas Press.
- Gowan, P. (2009) 'Crisis in the heartland: consequences of the new Wall Street system', *New Left Review* 55, pp. 5–29.
- Habermas, J. (1973) *Theory and Practice*. Trans. J. Viertel. Boston: Beacon.
- Habermas, J. (1985) *The Theory of Communicative Action*, Volume 1. Trans. T. McCarthy. Boston: Beacon.
- Habermas, J. (1987) *The Theory of Communicative Action*, Volume 2. Trans. T. McCarthy. Boston: Beacon.
- Habermas, J. and Luhmann, N. (1971) *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie—was leistet Systemforschung?* Frankfurt: Suhrkamp Verlag.
- Harvey, D. (2005) *The New Imperialism*. New York: Oxford University Press.
- Harvey, D. (2008) 'The right to the city', *New Left Review* 53, pp. 23–40.
- Horkheimer, M. (1982 [1937]) 'Traditional and critical theory', in M. Horkheimer, *Critical Theory: Selected Essays*, pp. 188–243. Trans. M.J. O'Connell. New York: Continuum.
- Jay, M. (1973) *The Dialectical Imagination*. Boston: Little, Brown.
- Jay, M. (1986) *Marxism and Totality*. Berkeley: University of California Press.
- Katznelson, I. (1993) *Marxism and the City*. New York: Oxford University Press.
- Kellner, D. (1989) *Critical Theory, Marxism and Modernity*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Kolakowski, L. (1981) *Main Currents of Marxism*, Volume 2: The Golden Age. Oxford: Oxford University Press.
- Koselleck, R. (1988) *Critique and Crisis. Enlightenment and the Pathogenesis of Modern Society*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lefebvre, H. (2003 [1970]) *The Urban Revolution*. Trans. R. Bononno. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Marcuse, H. (1954) *Reason and Revolution: Hegel and the Rise of Social Theory*. London: Humanities Press.
- Marcuse, H. (1964) *One-Dimensional Man*. Boston: Beacon.



- Merrifield, A. (2002) *Metro-Marxism*. New York: Routledge.
- O'Connor, B. (ed.) (2000) *The Adorno Reader*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Peck, J., Theodore, N. and Brenner, N. (2009) 'Postneoliberalism and its discontents', Center for Urban Economic Development (CUED), University of Illinois at Chicago, unpublished manuscript.
- Postone, M. (1992) 'Political theory and historical analysis', in C. Calhoun (ed.) *Habermas and the Public Sphere*, pp. 164–180. Cambridge, MA: MIT Press.
- Postone, M. (1993) *Time, Labor and Social Domination: A Re-interpretation of Karl Marx's Critical Social Theory*. New York: Cambridge University Press.
- Postone, M. (1999) 'Contemporary historical transformations: beyond postindustrial theory and neo-Marxism', *Current Perspectives in Social Theory* 19, pp. 3–53.
- Robinson, J. (2006) *Ordinary Cities*. London: Routledge.
- Saunders, P. (1986) *Social Theory and the Urban Question*, 2nd edn. New York: Routledge.
- Schmid, C. (2005) 'Theory', in R. Diener, J. Herzog, M. Meili, P. de Meuron and C. Schmid, *Switzerland: An Urban Portrait*, pp. 163–224. Basel: Birkhäuser Verlag.
- Soja, E. (2000) *Postmetropolis*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Soja, E. and Kanai, M. (2007) 'The urbanization of the world', in R. Burdett and D. Sudjic (eds) *The Endless City*, pp. 54–69. London: Phaidon Press.
- Therborn, G. (1996) 'Dialectics of modernity: on critical theory and the legacy of 20th century Marxism', *New Left Review* 1/215, pp. 59–81.
- Therborn, G. (2008) *From Marxism to Post-Marxism?* London: Verso.
- Wiggershaus, R. (1995) *The Frankfurt School: Its History, Theories and Political Significance*. Trans. M. Robertson. Cambridge, MA: MIT Press.